

# 美少女エクソシストの聖水？ むしろご褒美です！

千夜詠  
挿絵／アライノブ



立ち読み版



## 災討華実

さいとう かみ

花蛇学園に転校してきた美少女。聖杯をその身に宿し、最強とも最凶とも呼ばれるエクソシスト。



## 福山武偉

ふくやま たけい

幼い頃から女子によく虐められていた少年。そのせいか本人の自覚なしに特別な力が育まれてしまった。

# 人物紹介

## 魅莉亜

みりあ

一見無邪気そうな華実によく似た謎の美少女。



## 大原南季子

おおはら なきこ

武偉と璃羽の担任教師。清楚な美女だが結構着痩せするタイプで、大人の色気を感じさせる。生徒の人気が高い。

## 悠木璃羽

ゆうき りう

武偉の幼馴染みでクラスメイトの少女。周囲から典型的なツンデレと呼ばれているが本人は強く否定している。



「ふつま……?」

「祓魔師、つまりエクソシストの部活ってことね」  
嫌な展開を予感させられる。

「帰っていいか?」

「あら、ここまできて、したくないの?」

分かつている。ここまで華実は何をさせてくれるのかを一切喋っていないのだ。もう十分彼女の性格は把握できているのだが、たとえ九割九分九厘が詐欺だとしても、残り一厘にかけてしまう男の悲しい性。

「うう、この部屋に入るんだろ」

ドアノブに触れた途端のことだ。初めに弾かれるような痺れが走る。次にまるで地獄に引きずり込まれるような戦慄を覚えた。一秒にも満たない刹那。くらくと目眩を感じ、それがまた瞬時に治まると、扉は開かれた。

(な、なんだったんだ、今の?)

呆然と自分の手を見つめる。

「ふうん、さすがね、童貞マゾ犬」

「おい、今、いつもの罵声に何か余計についてなかったか?」

「褒めてるのよ。本当にね」

そう言った華実の顔は確かに真剣であったように見えた。



中は八畳相当の埃っぽい部屋だった。四角いテーブルと白ボード、大きめのデスクがそれぞれ一つずつ。パイプ椅子が四脚あるだけの簡素なものだ。

「二年前のある事件を境に、この部はなくなったのよ」

「事件？」

「そう……忌まわしいわ」

どうにも詳しくそれを聞きだすような雰囲気ではなかった。華実はじつと一点を見つめていて、その時の表情は酷く冷たい怒りを隠しているようにも思えた。彼女の視線の先には、ピンで壁に刺された一枚の写真が飾られている。そこには四人の女生徒と一人の女教師が映っていた。

（あれ？ この先生、どこかで見たことあるような……。ふわふわの金髪……。あつ……。この子……）

五人の中心で屈託のない笑顔を見せている少女は、制服は高等部のものであったが容姿は中等部以下で、月光に照らされた夜闇のような濃紺の髪に気の強そうで幻想的な赤紫の瞳をしている。隣に立っている美少女とよく似ていた。

「武偉、この部を復活させるから、まずは掃除をしてちょうだい」

「はあ？ なんて俺が……。って祓魔部っていったい何するんだよ？ いや、既に俺は部員なのか？」

華実はもういつもの雰囲気に戻っている。

「いちいち質問が多いわ。察しなさい。はあ……、じゃあ、まず、私がエクソシストなのだから祓魔部が復活するのは当然。やることは、悪魔祓い全般。貴方は私の奴隷犬なのだから従うのは必然。だからさっさと掃除なさい。特に床は念入りにね。貴方が舐めることになるのだから」

「床を舐め……って何させる気だよ！」

「嫌なの？」

次にどんな脅しがくるのか身構えつつ、男の誇りと勇気を振り絞った。

「ああ、い、いや……」

「残念だわ。掃除をしてくれないと、ここは埃っぽくて服も脱げやしないわ」

「じゃないです」

二十分後、壁に染みはなくなり、床はワックスをかけたばかりのようにピカピカになった。上手く担がれていると気付いた時には激しい自己嫌悪を覚える。やりきった清々しさと落ち込みを交互に示す武偉の顔。

「面白すぎるわよ、武偉……」

「ほっといてくれ」

華実椅子の一つに座る。がっくりと膝をついた少年を見下ろすように。

「でも、まあ……、ご褒美は必要ね」

まさか、と顔を上げる。するとほんのりと艶の混じった表情が見えた。

ドクン、ドクンと鼓動を鳴らせる武偉の前で、絶世とも言える顔立ちと男好きする豊満な体つきをした美少女は上着を脱いでいく。

(お、落ち着け……、まだそんなエッチな展開って決まったわけじゃ……)

自分に言い聞かせながらも、初めて会ったその日の夜に唇を重ねた事実を思い出す。夢のような感覚であったのに鮮明に脳裏に浮かんた。

純白の薄い生地のブラウス。男をただの牡に変えさせるようなその前側の大きな脂肪の膨らみが動作のたびに柔らかそうに揺れている。僅かに汗ばんでいるように素肌に所々が張り付いて、夏ならばよく見る光景から猥褻な匂いを感じずにはいられない。

恥じらいよりも挑発的な指の動きでブラウスのボタンが外されていく。肉峰の谷間が覗け、そこから素肌の熱気と香りが漂ってくるようだった。

あの夜と同じように魅了されて少年はつい見入ってしまう。一つ、二つと次々に外されると、ゴクリ、唾を飲み込んだ。

艶やかな染み一つない新雪色の柔肌が露になっていく。華実は武偉から視線を逸らさず、ブラウスを脱ぎきった。

密室で少年と少女は二人きり。そこでうら若き乙女は性に最も興味津々な年頃の男性の前で、上半身下着姿となった。

(な、なんてもの、着けてるんだよ……)

普段のイメージと違う薄桃色のブラジャー。そしてある意味、彼女らしいデザインのそ

れは、ハーフカップの際どきで、縁が巨乳の柔肉に僅かに減り込み、少しずれるだけで乳輪が見えそうな危ういものだった。

少年の股間にあつた巨物に急速に血流が雪崩れ込んだ。見る側の恥ずかしさを感じながら、見られる側の頬が微かに赤らんでいるのに気付く。いつもは表情の乏しい彼女が、あの夜の唾液露だくな接吻の時のように、濃厚な色香を振り撒く悩ましがな表情を見せていた。それだけで、肉棒は硬直を増してズボンに正面から圧迫される。

「さすが童貞犬。もうハアハアしちゃつてるわね」

からかわれていると分かりながら、事実興奮状態を自覚していた。

「しよ、しよがねえ、だろ……」

「ええ、そうね。そうじゃないとご褒美にならないし……」

全身が上気しているように彼女の体中から牝が溢れてきている。パイプ椅子に座りながら少しだけ脚部を広げるようにしながら、長い髪の美少女は両腕を上げて手首を頭の後ろに回した。堂々としながら、そこに滲み出る羞恥。そんな状態を愉しむように笑む華実。

「この格好でしばらくいてあげるから、欲望のままに……脇を舐めてもいいわ」

「んな……っ！」

一気に美少女の脇の下に釘付けになった。どこよりも汗ばんでいるように見え、しつとりと熱く、体臭を濃く発する部分だ。強烈に吸引されてしまう。興奮と感動に似たもので、武偉の全身は震えていた。

「ば、馬鹿言え……。そんなことの、どこがご褒美……。ご、ご褒美……」

本当にしたらド変態だ。揶揄され、また一つ弱みを握られる。

だが身体は勝手に這い寄っていた。

(何で、この女は、こう……。エロくて……。綺麗で……。意地悪で……)

腕の付け根から香ってくる。膝立ちしながら、そこにどんな体勢で顔を近づけたらいいのかを考えた。ちよつとぐらい触れてもいいだろう。どんなに叱られても構わなくなつて、彼女の側面から膝立ちして腰に手を回した。

「縫りつく愚者の姿勢ね。じゃあ、お前の舌で私の臭いところ、綺麗にして」

首を伸ばすようにすると、たわわに熟した肉果実の下部が腕に当たってくる。むにゅつと重量で被さるように乳肉が包みだして、美少女の全身が甘い熱気を発していた。

(うああ、体温が、こんなに、やらしい……。オッパイが、俺の上で……。や、柔らか見え……。重いのに、き、気持ちよくなって……)

甘えるように抱きつく姿勢から見上げると、間近に二の腕の裏側の魅力的な窪みがあった。むんつ、と蒸れ立ち上り、汗と熱が籠っている。そこから降り注ぐ体臭は甘酸っぱく、だが不快感は無くなったくなくて、むしろ強烈に牡を目覚めさせてくるフェロモンのようだ。大人びた美少女の脇の下のにおい、そう意識するだけで、臭いは匂いに変換される。

(はあ、はあ、華実の……。わ、脇……)

フェチの変態であるという自覚はない。だがクラクラしながらうつつりとした表情にな



つてしまふ。

いくら他に人の気配のしない場所とはいえ、ここは学校の中だ。こんなことを出会って間もない男子にさせて華実はずいぶん平気なのだろうか？ 唇を開きながら、そんなことを考えて、だが瞬時に行為に至る興奮に掻き消される。

「どうしたの？ 正直にしていって言ってるのよ」

「し、しなかった後の方が怖いから、するだけだ……」

執拗に抱きついていられることも彼女のせいにして、心地よい息苦しさを何度も飲み込みながら、口の先を美少女の脇に近づけた。すうつと鼻で吸い込み、堪らない卑猥な芳香に肉棒は完全勃起して、だらつと唾液が滴るような舌先を伸ばす。

「べちっ……。とうとうペロでストリートヘアの少女の脇の下に触れてしまった。」

「ん……っ」

微かに鼻から漏れる甘い声。ピクツと身を震わせた華実の上半身の陰部から汗のしょっぱさが伝ってくる。途端に肉棒に甘美な電流が走って、悦楽にビクビクと脈動を繰り返した。

（俺……舐めてる。意地悪で性格悪い、でも、すっげえ美人の、こいつの脇を……。ぐちよぐちよに……）

更に舌を伸ばして、全体をべちちよりと張り付ける。

ふちゅ、ねちよねちよ……っ。欲求に支配されて、顔と舌をくねり蠢かせながら、ペロ



ペロと舐めて、つつき、卑猥に回転させては味わってしまう。

「ア……ふ、んん……、夢中になつてゐるじゃない、変態童貞……」

「う、うるせえ……はあ、んっ、ちゅ、ぺちよぺちよ……」

心なしか彼女の蒸れたような太股がモゾモゾと動いている。少年が脇肌を粘膜を絡ませる動きに合わせて、それは快楽に身悶えているようにも見えた。

「はあ……、本当に、お前はくっさい女の子の脇の下が大好きな、す、救い難い、はあ、変態ね」

愛し子を見つめるように優しげに細められた瞳に、性感を愉悅する妖艶な笑みの表情で華実はこちらに視線を送っていた。

学園に舞い降りた女神の脇を武偉はぐちよぐちよに唾液で濡らしている。興奮しつくした犬の滴りは健康的な艶白の肌を幾筋も伝い落ちていき、細いブラ紐に染み込んだ。

「変態？ はあ、ちゅぶっ、変態つて、お、お前は、ぺちや、ぺちより、どうなんだ」  
受け答えしながら、少年は恍惚になつてゐる。

そして煽る少女もまた舌先がのたうつたびに発汗を促進されていた。彼女の柔肌に朱が差し込んでゐるようで、とても熱い。

「え、ええ……んは……ア、そうよ、私も、へ、変態……。お前はそんな変態の、はあ、はあ、豚奴隷なんだから」

思い浮かぶ。これは高貴な令嬢だけが許された背徳の遊戯なのだ。そして下賤な庶民

の男は、その劣情を利用され、彼女の快感を満たして捨てられるのだ。

(ああ、俺は……こいつの快感の為だけに弄ばれるペット……、ふあつ、ああ！)

その意識に捕らえられると、信じられないくらいに、男根は快樂の痙攣を断続的に行って、射精と同じだけの悦が湧き起る。

ビュクンっ！ ビュクンっ！ と唸り、

「うっ、くはアあああ、ぢゅぶぢゅぶ……っ」

唇で大人びた美少女の脇の下に吸い付きながら、精を吐き出さないアクメを味わったような感覚。夢精した時に似た快感が永続してしまう。それを全身の震えで表して、ぎゅつと彼女の腰を抱きしめていた。

「はあ、はあ……、童貞汁……出したの？」

「出て……ねえよ」

心地よい気怠さを覚えながら、華実の脇腹に顔を寄せた武偉。嘘はついていない。ただイットのと同じだけの高揚感に包まれている。大人っぽい同級生の脇の下の香りに、自分の唾液の臭いが混ざって、この卑猥さに酔っていた。

「そう、じゃあ、まだ反対側が残ってるわ。どうするの、脇好きのフェチ犬？」

少年はそれに答えず、まだ甘え足りないようにもう一つの汗籠った場所に顔を擦り合わせていった。

感情が露になっていくのが分かる。彼に恥ずかしい姿を見られていると思うだけで、また魔性が吸われていきそうになった。

「それを武偉の手で穿かせてあげる。ほら、昔お漏らしした時みたいに大人しくしてよ。賢い君なら、今暴れたって無駄だってこと分かるよね」

武偉に正常に戻る兆しがあった以上、今は体力を温存しておいた方が得策かもしれない。両足の押さえがなくなったが、言われた通りに大人しく足を投げ出しておいた。

「ほら、いい子だね、華実。まず片足を上げて……」

子供に言うことを聞かせるような口調の武偉に、穿かせてもらっている状態が非常に恥ずかしく思えてくる。感情をコントロールしようと躍起になった。穿かせてもらっているんじゃないかと、自分が穿かせているんだと。

「オシメの方がよかったかな？ そうしたら大股開かせたのにね」

からかうような魅莉亜の言葉にも耐えて、ホットパンツは大きなお尻に収まった。ただ前のファスナーは鎖のせいで閉じることができない。濡れた陰毛が晒されたままになっている。

「死に装束が先に完成しちゃったね。ふーん、結局、華実つてば、どんな格好したって、エロエロだよ。淫気が濃いののは分かっていたけど、全身が自分は猥褻物ですって、訴えている感じだ。じゃあ、お前たち、こいつは体中性器みたいなものだから、好きなどころにザーメンかけちゃって」



ラグビー部の屈強そうな四人が四肢を持ち上げてきた。仰向けの状態で体を浮かされて、それは丁度男子らの腰の高さである。

全身が汗ばみ始めた少女を何十もの肉棒が取り囲んだ。いやらしい熱さが一齐に迫って、先走る淫水を漏らした亀頭がまず桜色に染まった頬を突いてくる。ぐにゅっと嫌悪する音が聞こえた。

「うぶ……っ、く、臭い……っ」

部活中に汗を掻いた男子の不潔な逸物が硬直しきった状態でヌメヌメした先端を押し付けてくる。さっそく淫水が頬を汚して垂れていった。

「て、てめえの、オマ○コより、よっぽどマシだろうが、へ、へへ……」

更に逆方からも襲ってくる。高貴な令嬢のような美顔が牡液塗れにされる顔ズリ。

皿に盛られた大きなプリンのように揺れる巨乳には、大勢が群がりたがった。

「これだよ、これ、うはあ、あの災討華実のオツパイに、俺、チンポ擦り付けてる」

たわわな乳房の卑肉が何本もの肉棒を柔らかく飲み込んで、艶やかな肌包んだ。弾力で自然に扱きたてて、無造作に突かれては、前後左右に揺らされる。乳房全体がぬちゃぬちゃとカウパーに塗れさせられて光沢していった。

「こ、こんなこと、くらいで、被虐を感じたり……、ひや……っ！」

ぬちゅっ、ぢゅぶ……っ、我先にとホットパンツのお尻に、太股にと全身が肉棒の熱さに包まれていく。亀頭から溢れる淫水が無数に粘液の線を作り、黒生地の間からペニス

が潜り込まされた。

ふちゃ、ぬぷぷ……。膣から肉ピラに溢れた牝汁がお尻に垂れていき、男根を滑らせる。ホットパンツの中は自ら滲み出した湿気と牝の先走りに濡れつくし、蒸れが加速してしまった。

(ああ、熱くて……。股間が、疼くうううっ！)

真つ白な手袋に肉棒が握り締めさせられる。すると牝の本能のように自然に扱きたててしまった。自分の掌の中でビクツと反応を示すそれについて嬉しささえ感じる。

違う。そう心の中で叫んでみても性処理の道具にされているという意識が止められない。否定しようとするど喘ぎとなつて、仰け反るような肉体の反応は更に男どもを奮い立たせていった。

「へへ、綺麗なうえに、全身オマ○コみてえに気持ちいいんだな」

ブーツとむっちりした太股の隙間にも強張りが捻じ込まれ、肉体のどこもかしこもねっちよりと湿つていく。柔らかな肉が男の性器に捏ねられて、皮下からいやらしい熱が発してきた。

体が糸引く粘液に汚されて、その気持ち悪さがかえつて自分が黴られているのだと教えてくる。己の汗と混じったカウパーが女体から生々しく臭い立った。卑猥なだけの存在へと塗りつぶされていく。

(武偉が戻るまで……。墮ちるわけには……。ヒッ……。いやあっ！)

顔の前で一人が自分で肉棒を扱っている。そいつはニヤあと笑って、次の瞬間、先端を少女の唇を割って捻じ込んできた。

「うぶっ！ んん……っ」

嫌悪の対象をしゃぶらされる。口内に広がる生暖かく硬直した感触は生々しく、いやらしい接触の臭いを鼻腔に届けさせた。ぐちよぐちよと舌の上で掻き回させて、唾液が刺激に溢れかえる。

屈辱と同時に強烈な被虐が全身を熱くさせ、鎖の音を響かせながら腰を身悶えさせた。

(き、気持ち、悪い……だけ。そのはず、なのに……)

ヂュブブ……ッ！ 頭を押さええられ、男の腰が眼前で距離を何度も変える。そのたびに強張りが喉を突き込んで、嗚咽しながら口端から涎をだだ漏れにしてしまう。

「ぶっぐっ！ ぶっ、ぶっ、やめへ……」

デリケートな喉の粘膜が削がれ、その苦しみから逃れようと舌を絡めていく。

早く終わらせたい。その一心からの行動は、元々器用な彼女の牝としての才能を露にさせた。

べちよ、ぬぢゆ、ぢゅっ……っ！ ピストンされる肉茎を巻くようにペロで愛撫し、濡れた唇を窄めて吸い付いていく。

(確か……、こ、こうして……)

男性を口に含むのも初めてだ。だが悪魔との戦いの中で何度もこの行為を見てきている。

魔性を理解する為に勉強もした。責め手として牡器官の弱い部分は熟知している。実戦でそれを確かめるのは今日が最初であるが。

(んぶっ……、生臭いのが、こんな、大きくて、硬くて……)

舌ペロ全体が過敏になつて、肉棒の形状を感じると、口内が陰部のように性感を覚えてきてしまう。濡れた唇がしっとり肉幹に張り付いて、男の腰運動のたびに震わされた。吐き気を催す苦しみが薄らいで、舌と喉の粘膜が挟り擦られる感覚は、まだ知らぬ腔の性感を連想させてくるのだ。

心地よく締め付けられる感触を覚えてか、彼はだらしなく口元を緩めた。亀頭の裏側を丹念に舐つて、男の淫水のしょっぱい味が広がっていく。

「うへえ、絶品だぜ、華実さまの口……」

唇の端からだらだらと漏れていく涎は牝汁のようで、口内から掻き回されて脳内にぐちやぐちやと淫猥に響いていった。

(んぐっ、んっ、んっ……、私の口……、男に媚びちゃう……。ち、違う……。されてるんじゃない。奉仕してるんじゃない。こ、これは、し、してあげてるのよ)

犯され嬲られる被虐が湧き起こってくるのを意識の変換で止めようとした。

だが、焦がすような嫉妬の籠った情熱的な視線を意識しないわけにはいかない。

「ふあ……っ、たけひ、み、見へる……。ち、ちがつ、んふっう！」

理解してしまうのだ。他の男の男根に体中を突き擦られる自分を見て、きっと彼は激し

い興奮と嫉妬の混じった感情を抱いている。それは一層嗜虐を煽り、感じた反応を見せれば見せるほど、後できつく仕置きを施そうとしてくるだろう。

どんな男のチンポでも感じるのか、この淫乱のマゾ豚。そう罵って武偉が巨根で頬を叩いてくる。拘束された華実は下着のない股間を大きく開かされて、もうぐっしより濡らしてしまった秘部を更に挿入されてしまう。

虐められてお漏らししたみたいにしやがって、この変態マ○コ女。

(あ、ああ、ダメ……っ！ そんな想像したら……)

膣孔がヒクつきだして、それが別の生き物であるかのように痙攣が刺激になった。くちやくちやと蜜壺自身が牝汁を舐めているようで己の肉体の示す淫らな反応すら羞恥に対象となってしまう。

「うひひ、災討華実が、俺たちの肉玩具になるなんてな」

「皆言ってたぜ、この女、全身オマ○コみてえだつて」

必死で被虐へと傾倒していくのを止めようとしている。全身を牡部で滑擦る男たちはそれを嘲るような挿入の言葉を吐いて、学園の女神を墮とそうと躍起になった。

(の、飲み込まれたら、だめ……)

くちゅっ、しこしこ……。白グロブの両手が淫水に塗れながら男本体を扱きたてる。一人でも早く満足させてこの恥虐を終わらせなければ、自分の体がどんどん意志から離れて牝の本能に突き動かされてしまう。



でも、

（こ、このチンポの形……、やらしい……ああ、なんだか、武偉の……）

大きさは彼ほどではなかった。だがカリ首の張りのある形状が自分の下着越しに弄んだものを思い起こさせ、卑肉となった全身が狂おしく身悶える。

勝手に手首が夢中になって、二本の男を悦ばせていった。

「うほっ、す、すげえ、手マ○コ……スケベすぎ……」

指間から牡の淫水がねつとりと漏れていく。ズリ擦るごとに掌が過敏になって、そこからも痺れるような甘い性感が湧き起こった。

「本性丸出しになってきたんじゃね。くっ、こっちも我慢できねえ」

ぢゅぶっ！ ぬぢゅぢゅ……っ！ 唇を塞いだ強張りが一層苛烈に喉を突いてきた。

「ぐほっ、あがアっ！ ヒっ、ヒイツ、や、やめれ、喉っ、ぐひよぐひよおおっ！」

唾液が掻き回され、涎が飛沫を上げていく。亀頭で口蓋垂が何度も叩かれた。普通なら吐き気を催す刺激。なのに喉彦のどひこはクリトリスになったように鋭敏に快感を伝えてきてしまう。頭の中にびりびりと響いた。

「ヒギィっ、喉チンコっ、あふいイいいいっ！」

肉棒に囲まれたたわわな乳房を無造作にプルプルと震わせて、強張りの生暖かさを感じるお尻を扇情的に揺らして喘ぐ。無意識に牡を刺激して、性処理に卓越した牝であることを証明してしまった。

「ハア、ハア、か、華実さまア、俺たちのやらしい肉っ、牝肉うううう！」

強靱な手に顎が掴まれ、男の腰が擦り付けられる。欲求のままのピストンのたびに、ペチペチと睾丸が麗顔を叩いてきた。唾液塗れの光沢した唇に抜けた運動部員の陰毛が張り付いて、気位がズタズタに壊されていく。

「はぶっ、ぶっ、ぶひゃっ、も、もう、らひて……」

抵抗する力をなくし、男たちの劣情だけを受け入れる肉体。これではまるで、

「くっ、うう、いいぜ、出してやる。この、精液便所！」

ドプツツ！ ドビュルルツツ、ドプドプツツ！

「ぬぐっ！」

ビクビクと擦り続けてきた灼棒が喉奥を更に挟り込む。開かれた鈴口からドツと濃厚なザーメンが雪崩れ込んできて、直接食道へと注ぎ込まれていった。

（いやあああつ！ こ、こんな男のっ、臭いのがア……）

酷く咽せ込みそうになって、それでも熱いものが胃の方へと流れていってしまふ。

「あぐア……、ハア、あ……、ジャーメン、飲ましゃれ……」

いつも冷静であったエクソシストの少女が、引き抜かれても、刹那、茫然自失となった。色霊の影響か、異常に大量なザーメンの量で、半分が逆流して口元が白濁に染まってしまふ。腫が泳ぎそうになった。

「ほらほら、休んでんじゃねえ、ジャーメン便器」

「んんっ！」

暇を与えず、欲求を滾らせた男が肉棒を唇に押し込んでくる。今度の奴のはやけに恥垢臭い。鼻腔にツンと突き刺さってくるようで、もはやそれすら肉芽を甘く痺れさせてきた。恍惚に本能のみの腰振りを見せる男。それは口内の心地よさを確かに想像させて、「お、俺にも」と決して大きくはない唇にまた男根が追加される。

「はぐうっ！ ひよんな、入らにや……むぶっ！」

二本が同時に口内に押し込められて、ペニスの形状が外側から見て取れるほどに交差しながら内側から頬が叩かれた。

ぐしよっ！ ぬぶぶ……っ！ 息苦しさが膨らんで、いやらしく腰を振ってしまふ。するとホットパンツに潜り込んだ肉棒が堪らず脈動して尻肉に快感を伝えてきた。

性感の反応をするだけの性処理玩具は、もはや彼らを満足させる以外に抵抗する手立てを持たず、必死に、だが巧みに、肉棒を抜き、柔肌に覆われた肉体を揺すり、そしてものが生き物のように、ぺちよぺちよっ、と激しく舐め回していった。

どこか半狂乱になった美少女の痴戯に、これまで興奮を順当に高め続けた輩は、降伏を宣言していく。

「くふっ、も、もう我慢できねえ」

「お、俺も……、ほらほらっ、ザーメンくれてやるよ、変態マゾ」

ドプっ！ ドビュルルルッ！ 二本が同時に脈動して、またしても粘りつくような濃厚

な白濁が放たれた。

「んぐっ……、あうう……、あ、あふい……、うぶっ！」

ブシャッ、と射精の勢いが口内で跳ねて、逆流する精液が鼻からも漏れてしまう。

顔射されたように大人びた美しい顔がザーメンに埋められたようになった。その下で屈辱に腫から雫を零し、そんな自分が悔しくて仕方がない。

「はは、いい顔になったじゃねえか。はあ、はあ、ほら福山にも見せてやったらどうだ」  
見ないようにしてきたのに髪を掴まれ、顔を武偉の方へと向けさせられる。

平然としようとすると顔が作れない。首輪をした少年は冷めた表情に虚ろでありながらギラギラと劣情を滾らせた腫でこちらを見ていた。

そして再び、ドクッ！ ドクドクッ！

勢いよく熱い腐液が、プルンプルンと揺らされる肉果実に振りかけられる。

すると武偉の肉棒がピクッと反応を示すのだ。

（ああ……っ、私が汚されるのを見て、興奮してくれてる！）

ホットパンツの中が蕩けるようになって、また蒸れが濃くなっていく。精液を注がれた肌に甘い痺れが走って、垂れていく刺激が心地よく感じてしまう。

じりじりとクリトリスが焼かれてきた。いけないと思って気を引き締めるのに、

ドビュルっ！ ブビュウ——ッ！ 次々とザーメンをかけられるたびに、被虐感が湧いてきてしまった。

ドブドブッ！ どびゅんっ、どくどくっ！

肉棒を乳肉に埋め込んだままで射精される。擦り付けられる太股に大量の白濁水が滴つて、大人びた麗顔から艶やかな髪に至ってザーメンが絡みついた。

ブーツの中に、ホットパンツに捻じ込まれたまま、びゅくびゅくと肉棒が何度も痙攣を繰り返して、黒衣は濁った白に染められて、連続で揺らされる巨乳は精液に埋めつくされていく。

ドビュ、ドビュっ、と彼らの強烈な欲求そのままの勢いで腐液が振りかけられるたびに、アクメのように華実の女体は喘ぎ仰げ反った。

「ふあっ、はあ……熱い……っ、臭いので、ひゃっ、ああ、体溶けちゃうううっ！」

牡汁に塗れた場所から、どんどん汚辱の快感が染み込んできて、華実はいやらしく身悶えてしまう。ホットパンツの中に溜まり込んだザーメンを洗い流すように弛緩した膣から牝汁が溢れ漏れていった。

（こ、こんなことで、ハア、ハア、ア……、感じちゃうっ……なんて、あ……ああっ、ダメっ、ヒッ！ ヒイっ！）

蔑む笑みを浮かべる武偉。

「ふん、華実って、本当はすごいマゾ豚だったんだ。ほら、こうしてやる」

彼は自分の強張りとお繋がり鎖を思い切り引っ張った。

鋭敏な肉芽に強烈な衝撃が走る。





「ああいうのって、恥ずかしいから気持ちいいらしいよ。いや、私はそういうんじゃないからね」

蔑みと濃厚な劣情の籠った瞳が増えて、灼熱のように肌を焦がしてきた。

ぬちゃっ、ぐちゅっ……。歩くたびに擦れる肉ビラから湿った音がして、実際に牝汁が奥では溢れかえっている。

(私……こ、こんなことして……感じちゃってる。認めたくない。でも……魔性が、あんなに出ていつちゃうってことは……)

嗜虐と被虐の魔性の関係では、よりM性の強い方からS性のある方への一方通行だ。これは武偉よりも華実の方が被虐の性癖が強いことになる。

「ねえ、華実……歩くだけじゃ、退屈しちゃったよ」

「しゃ、喋ったら、仲間と思われるんじゃないの？」

「ボクたちを覆った結界に細工しておいたから、ボクの声は外には漏れないよ。ただし、君のエッチな喘ぎ声とかは聞こえちゃうけどね」

まったくこういうことには抜け目がない。

「で、なに？」

「おしっこしてよ。そのグラウンドに降りる階段のところでき」

「も、もう、出ないわ」

「大丈夫、さつき気付けで飲ませてあげた飲み物に、よく効く利尿剤も混ぜておいたから。それに華実って、お漏らし得意だよね」

本当に腹立たしいと思いがちながらも、つい、何十人も集まった衆人の前での放尿を思い描いてしまう。それで得られる羞恥はどれほどのものか。その瞬間、クリトリスが強烈な熱を発し、魔性がまた雪崩れていきそうになった。

「はうう……っ、だ、だめっつ……、出ていかないで……」

内股になって股間を押さえる。くねくねとお尻を振ってしまうと、「おおっ」と観衆の男子らが沸いた。

「あはは、本当に催したみたいになったね」

二度の経験から、何とか魔性の流れをコントロールする術を覚えた。だが、これは被虐の魔性に肉体が馴染んできた証拠でもある。身も心も完全にマゾ牝へと向かっているのだ。

「はあ、はあ、こ、こんな状態だと、お、おしっこなんてしたら……」

「するんだよ。でないと、この場で武偉に別の女の子を襲わせるけど、それでいいの？」  
そんなことになれば、たとえ武偉が正気に返ったとしても、彼の人生は悲惨なものとなる。冷徹な仮面を被り続けてきた少女は、あの二年前の事件以来忘れていた、楽しい、という感情を抱かせてくれた彼の為に恥ずかしい罵声を浴びる決意をした。

「い、いいわ……。やってあげる」

「口の利き方がなっていないんじゃないかな。そうだ、自分がどんな女か、皆に解説しながら

らしてよ。君だって、仮にも責め手だったんだから、何て言えばいいか分かるよね？」  
もう拒めはしない。一度、切なさとしさを混ぜたような瞳で武偉を見た華実は、階段の中ほどまで降りていった。

男子部員の多くが体育館で乱交を続けている今、グラウンドには女子部員が大方を占めている。彼女らは突然の痴女の出現に練習を中断してこちらを見つめていた。強烈な蔑みを露骨に表情と態度に表している。

逆に校舎側には男子生徒が大勢詰め掛けていた。こちらからは全身を這い回る強い視線が注がれて、直球な劣情に溢れている。

(ン……っ、お外で……こんな、いっぱい人が見ている前で……、こ、こんな破廉恥な姿のまま、お、おしっこ……)

全身が震えてしまうのに、子宮から膣、外陰部にかけてが全部ひりひりと焼けるように熱い。それがどうしようもなく心地よくて、溺れていってしまう感覚が怖くなった。

クラクラと目眩を感じながら、一人の少年の姿を脳裏に描いて、ぐっど唇を噛む。

「私、二年二組、災討華実は、今からここで、お、おしっこ……します」

ざわつく声が聞こえてきた。校舎の中にいた男子生徒の何名かが飛び出してきて、結界に阻まれる場所まで急ぎ来る。女子生徒は嫌悪を露にそれでも本当にするのかと注目を外さない。

宣言した直後、重なり合う肉ピラの挟み込みから淫蜜が漏れて、幾筋も太股の内側を流

れていった。黒いブーツの中へと滴っていく。

腰を下ろした。いよいよと邪念に満ちた期待が突き刺さってくるようになって、脇の下に濃く緊張の汗を掻く。

（ふあっ、オ、オマ○コ……っ、ふわふわして……お尻の孔……ジンジンしちゃう……あ、ああ……っ）

泣きそうに瞳を潤ませながら、呼吸だけを乱れさせる喘ぎ。強い興奮状態を自覚しても気分の高揚をコントロールできない。躍りになって魔性の流れを制御して、しゃがんだ姿勢から膝を左右に開いていった。

「くひゅう……っ、牝豚華実の……オ、オマ○コっ、感じまくって、はあ、はあ、もう濡れ濡れの、ぐちよぐちよですうっ！」

瞳をぎゅつと閉じながら、女の子の本能で閉じそうになる太股を震わせる。なんとという羞恥か。これでもまだ変態行為の準備にすぎない。

グラウンドに集まった女子部員らの多くが、顔を手で覆いながら、その指の合間から見つめてきていた。汚らしいものを見る目つきで、蔑む会話をしているのが分かる。男子たちは結界に邪魔されながら、齧り付いて見える位置まで移動してきた。どんな風に思われようと、学園に舞い降りた女神の至極恥ずかしい部分と行為の瞬間を見逃す方が後悔するのだ。

羨望と憧れの態度で接してきた学友らの前で、文武に優れた優等生の美少女は、恥部を

丸出しにそこから絶え間なくスケベ汁を垂れ流していく。放尿の前から彼女のムラムラと牡を悩ませるお尻の下に滑る液溜まりを作った。

「あつ、はあああつ……、やらしい華実の姿を見られて、マゾの私は、今にも、イっ……イっちやいそうなんですうっ！」

言わされているのだと心の中で呟き続けていても、叫ぶごとに精神が乱れてくる。消え入りそうな冷静な自分が考えた。仮に自分がさせている立場だったら、この女は真性のドMにしか見えない。

「はあ……、はあ、はあ……、だ、だから、もっ、もつと見て……、く、狂わせて……っ！」

両手の白い手袋の指先で、グイッと自ら肉裂を左右に広げてみせた。濡れ固まった恥毛が垂れ下がり、パツクリと開いた牝のピンクの粘膜が外気に直接当てられる。どぷつと肉ビラの合間に溜まっていた淫蜜が猥褻な香りを放つオイルとなつて大量に滴り落ちていった。膣孔がヒクヒクと喘いでいる。

このまま精神まで病んでしまえば、どれほど楽になるのだろうか。責め手に徹しながらも肉棒を嫌悪して、処女であり続けた無垢な部分が苛まれ、それでもやわではない自分の精神力がこんなにも憎らしく思えた。

全身を汗ばませ、その上、ついさつき二度もお漏らししたというのに、利尿剤が効いてきたのか尿意を催してくる。元々聖水をできるだけ溜め込めるように鍛えてきた膀胱は、人よりも容量が大きかった。悪魔を祓う為に身に付いてきた技量で、いつでも自在に放尿



できる。

「うはあああつ、そうですねうう！ 華実は、尿口がゆるゆるの、恥ずかしいお漏らし女なの。ふあつ！ あああつ、出すうううつ、おしっこつ、出しますううう！」

刹那、学園内が静まり返った。

プシヤあアア——ッ！ 弛緩した尿口から弧を描いて小水が噴出していく。解放感にアへるような顔を見せてしまい、だらしなく涎を垂らした唇をきつく結ぶ。排出口と奥弁が震えて、その快感に尻孔まで甘く痺れてきた。

男子らの興味と劣情の溢れた歓声が湧く。女子の何人かが悲鳴をあげて騒ぎたつ。

「すげえ、本当にしやがった。うへえ、きたねえ」

「ちよつと、なにあの子、やつば変態？」

「うほ、あの華実さまが、お、おしっこ見せてる。やべえ、やべえ……」

「やだやだ、なんであんなもの、見せんよ、おかしいんじゃないの？」

体中に、秘部に、挿挿や蔑みの言葉が染み込んでくる。強烈な羞恥と共に被虐の快楽のうねりを作り出し、もつと原始的な放出の悦に浸って、飛んでいきそうなほど昇り詰めていった。

「ふっひやつ、あはあああんつ！ おしっこつ、みりやれてえ——つ、真性の変態つ、マゾ豚、イ……つ、イク……。イクうううつ！ ひゃふつ、ひゃつ、ふああ……」

ブルブルと全身を震わせ、時折ビクつ、ビクッ！ と体を跳ねさせる。羞恥マゾのドス



ケベな絶頂姿を晒して、焦点定まらぬ瞳が泳いだ。真っ白になった頭の中でキーンと鳴り響きながら、嘲る言葉が幾つも届いてくる。墮ちていく心がそれを、もつと、もつと、と貪欲に求め、自分が救いようのない変態の牝豚になったのだと思い知った。

「はうう、うう……、ハアハア、き、きもひつ、いい……っ」

絶え間なく被虐を煽る視線と言葉の刺激にむず痒そうにお尻を揺らす妹の傍に姉が寄る。「あらら、魔性を吸つてもいないのに、こんなに激しくイっちゃうなんてね。お姉ちゃんは呆れ返るしかないよ」

やれやれ、といった仕草で首を振る魅莉亜。微かに残った口惜しさと華実の理性が、仇の向こう側にある少年の姿を視界に捉えて、涙を流させた。

+

美少女転入生の放尿ショーが終わっても、誰一人としてそこから立ち去らなかった。

「やれやれ、埋葬は親族とか近親者だけで行うものだけど、こんなに参列者がいるとはね。ボクは嬉しいよ。こんな破廉恥な妹でも、こんなに想われていたなんて。まあ、どんな風に思ってるかは、想像つくけどね」

クスクスと笑う姉に、泣きそうな顔で睨むしか今はできない。魅莉亜の指定したグラウンドの中心にやってきた華実の露出した肢体の肌では、男たちのザーメンが乾いて白くこ

びり付いていた。それを噴出していく汗が流す。

「ここだよ。ここで、エクソシストのボクも埋葬されたんだ。無数の悪魔に犯されたボクの喘ぎに呼応して、この広いグラウンドに巨大な魔法陣が現れた。全ては学園の生徒たちを守る為だったけど、彼らは自分可愛さに、ボクを生け贄に差し出したのさ」

二年前の真実を華実は無言で聞いていく。

「ねえ、華実……。エクソシストってわりにあわないよね。壮絶な修行に耐えて、身を引き裂かれる想いしながら、人知れずただ守る。誰も褒めてはくれない、称えてくれない。心まで陵辱されて、死と隣り合わせの毎日。まあ、でも、そんなこともうどうでもいいんだ。邪神様が教えてくれた自分の欲望にただ正直になること。それだけで救われるんだ。それを世界中の人たちに教えてあげる」

そんなのは人間の尊厳をなくしたただの獣にすぎない。少し前の華実ならそう反論しただろう。魅莉亜の言葉に耳を傾けるのに集中できなくて、熱く疼く卑肉をモジモジと擦り合わせていた。

「いつ、いいから、一思いにさっさとなさいよ」

「焦っちゃだめだよ、華実。準備が必要だからね」

両手を左右に魅莉亜は広げる。片手に妖刀を出して、その柄尻から一斉に無数の鎖がグラウンドから校舎まで一分とかからず伸びていった。何事かと目を丸くする生徒や教師ら。地面を這い、窓ガラスを割って足元にやってきた鎖が、白ゴスロリの少女の口が裂けるよ

うな笑みの途端、そこにいた全員の体の自由を奪って巻き付いた。

「うわあつ、なんだこれ!!」

「ちよ、ちよつと、なに? いや、変なところ、食い込んで……」

「痛い、痛いよオ、た、助け……」

赤らんでいた顔が蒼白になる。体の疼きを一瞬忘れて、眉を顰めるようにしながら魅莉亜を睨んだ。

「まさか……」

狂気に笑む姉。

「ああ、そうだよ。ここにいる全員から魔性をわけてもらっているんだ。一人一人は大して才能もない微々たるものだけど、これだけ大勢いれば、ね。体育館にいた連中からも貰ってるから、うん、随分と集まってきた。ああ、来た来たあつ!」

ぶわつと小柄な少女のゴスロリスカートが風で捲れ、可愛らしくも大胆なTバックの黒のレース付きショーツが覗けた。その頼りなく狭いクロッチの横の隙間から幾十もの触手が噴き飛び出てくる。

ピンクの女の粘膜色をしたそれはぬらぬらと全体がねつとりとした液に塗れていて、伸びた傍から滴らせていた。甘ったるくやけに卑猥な香りが放たれ、華実の頬が再び桜色に染まる。

(な、なに? こ、この匂い……、普通じゃ……)

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



三次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



魔法のヒサシ

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



プリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!  
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



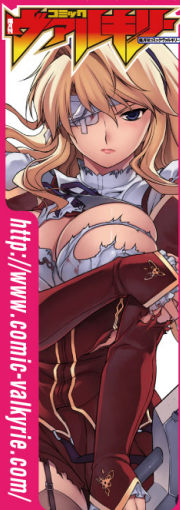
## 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!